

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 二字漢字語のデータベースによる動詞化と形容詞化の日韓対照研究

氏名 朴善嫻

論文内容の要旨

本研究では、日本語と韓国語に存在する2字漢字語に着目し、両言語における同形漢字語に付加される語尾を集計し、計量的検討を行った。また、日本語と韓国語の同形語だけではなく、一方の言語のみに存在している漢字語も検討に入れ、それらの漢字語に付加する語尾の情報もデータ化した。そこから、両言語間の2字漢字語の形態的特徴が比較対照できるデータベースを作成した。

第1章では、日韓両言語間の類似性のうち語彙的類似性は非常に高く、両方とも自国語の語種の中で漢字語が半数以上を占めていることを記述した。韓国語の場合は、使われている語彙の約7割は漢字に変換できる漢字語であるが、現在、韓国の日常生活で使用されている文字はハングルであるため、漢字を使うことはほとんどない。まず、韓国語の中で漢字語が使われている場面や、韓国での漢字語の使用を本研究の背景として紹介した。このような韓国語における漢字語の位相・漢字文化の背景・学校教育における漢字政策の状況を述べた。それにより、韓国語に内在している漢字語の使用現況が確認できた。両言語で多用されている2字漢字語の類似性や、漢字語に関わる語尾における形態的な類似性や相違性に着目し、本研究の成り立ちについて述べ、日韓両言語における2字漢字語のデータベースを作成することを目的とすることを述べた。

第2章では、韓国語の漢字語に関する先行研究を概観し、本研究の位置づけを行った。韓国語における漢字語の起源を探り、その漢字語が韓国語の固有語に同化され使用し続けている語彙性特徴の検討を行った。また、語根として使われる2字漢字語に付加する語尾について先行研究を検討した。具体的に、漢字語に付加される語尾において、動詞性・形容詞性を有している2字漢字語に関する語根のメカニズムを分析した研究を含め、それに付加される接尾辞の *-hada* や *-doeda*、「的」の拡張した使用について検討した。それにより、漢字語が韓国語の言語体系に同化され、固有語との融合により成立していることが確認でき、これで、日韓両言語の漢字語における比較対照の根拠に成り立ち、両言語の2字漢字語をデータベース化することに意義があるということを確認した。

第3章では、韓国語の2字漢字語に *-hada* が付加することで動詞あるいは形容詞となるか、語彙性アスペクト特性を検討した。韓国語の高使用頻度の漢字語 2,000語を抽出し、これらの語に *-hada* が付加されて動詞あるいは形容詞になるかどうかを、「開始」「継続」「終結」「状態」の4つのアス

ペクトおよび使用頻度で予測する二項ロジスティック回帰分析を行った。2字漢字語 2,000 語のうち動詞として *-hada* が付加されるのは 843 語で、その中でも「終結」の aspekto の有無で 81.49% (687 語 / 843 語) が予測できた。「開始」と「継続」の aspekto は、「終結」との重複が多かった。「状態」は他の aspekto との重複が少なく、「終結」に次ぐ 21.35% (180 語 / 843 語) の予測力を示した。形容詞として *-hada* が付加されるのは 86 語であった。「状態」の aspekto の有無だけで形容詞としての *-hada* の付加が 90.69% (78 語 / 86 語) 予測できた。つまり、2字漢字語の *-hada* 付加による動詞化は「±終結」と「±状態」の aspekto の特性で予測でき、形容詞化は「±状態」で大部分が予測できることが分かった。

第4章では、日本語と韓国語の共通した2字漢字語の形態統語的な類似性と相違性を計量的に検討した。2字漢字語の中でも、ある特定の語尾が付加されることにより、名詞が動詞化あるいは形容詞化する語で日韓ずれがある語があり、日韓両言語で動詞になる語でも、その漢字語が能動態か受動態かにより、日韓でずれが生じる語がある。また、形容詞の性質を持つ接尾辞「-的」の付加も調査対象に入れ、「-的」の出現傾向も検討した。その結果、調査対象語の 1,872 語のうち動詞は、日本語は 609 語 (32.5%) で、韓国語は 631 語 (33.7%) であった。一方、形容詞は、日本語は 169 語 (9.0%) で、韓国語は 127 語 (6.8%) であった。動詞と形容詞の両品詞を持っているのは、日本語は 26 語、韓国語は 11 語であった。また、動詞に関しては韓国語では受動態と能動態を分けて集計した。その結果、*-doeda* が付加可能なのは、631 語のうち 318 語 (50.4%) であった。これらの日韓両言語に現れる形態統語的な違いを明らかにすることで、母語からの干渉が起りやすい語彙とその特徴を挙げることにより、日本語学習をより効率的に進められるものとする。

第5章では、本研究での最終的な目的とする「日韓2字漢字語データベース」について、漢字語の抽出からデータベースの作成の過程や結果を述べた。データベースは3つの資料に分けて作成し、さらに漢字語の情報別に細分化した。「資料Ⅰ」には、[シート1]「2,060語の日本語辞書調査」：日本語能力の中級のレベルに相当する語彙のうち2字漢字語(2,060語)の品詞情報が得られるようにした。[シート2]「1,872語の日韓同形2字漢字語」：日韓同形語の1872語に対して、日本語と韓国語の品詞の情報が比較できるように載せた。[シート3]「韓国語に無い漢字語188語」：韓国語には存在しない日本語独自の188語に対して品詞情報が参考できるように載せた。[シート4]「日韓同形語の品詞別割合」：日韓同形語で動詞や形容詞においてずれがある漢字語の項目が確認できるように載せた。[シート5]「日韓の形容詞性2字漢字語」：日韓同形語の1,872語の中で、日本語と韓国語の形容詞を比較できるようにした。「資料Ⅰ」の作成を通して、日本語能力が中級レベルまで上がるにつれ、全体的に日韓での同形語の語数は、急増することが分かった。また、これらの同形語において、動詞は韓国語の方が多く形容詞は日本語の方が多いことが分かった。しかし、その差はそれほど大きくはなかった。

一方、「-的」の付加においては、日本語より韓国語の方が多かった。特に、2級の語彙では日韓の差が他の項目より非常に大きかった。「資料Ⅱ」には、[シート1]『旧試験』日本語2字漢字語3,698語：日本語能力上級レベルに相当する語彙のうち、2字漢字語(3,698語)を抽出し、その品詞情報と語尾の付加可否が得られるようにした。[シート2]「日韓同形2字漢字語3,419語」：3,698

語のうち、日韓同形語 3,419 語の日本語の品詞と韓国語の品詞を対応させて比較できるように並べた。〔シート 3〕「韓国語に無い漢字語 279 語」: 3,698 語のうち韓国語には存在しない漢字語を分け、その特徴や傾向が分かるようリスト化したものである。「資料Ⅱ」では、日本語学習において上級レベルに相当する 2 字漢字語を対象とした。従って、日本語の語彙学習における基本的な 2 字漢字語の品詞性が確認できるようにした。さらに、韓国語母語話者にとっては学習言語と母語との関係が明確に比較できるようにした。「資料Ⅱ」の作成を通じて、中級レベル（2 級）から上級レベル（1 級）に上がるにつれ、2 字漢字語の語数そのものは増えていない（2 級：1,666 語、1 級：1,638 語）が、動詞として *-suru* が付加される語は増えていることが分かった（2 級：534 語/1,666 語、1 級：691 語/1,638 語）。このように初級から中級では 2 字漢字語の語彙数が急増したことに比べ、中級から上級の間ではそのような変動はなかった。つまり、上級レベルでの 2 字漢字語の語彙性の特徴は 2 字漢字語そのものに内在している品詞性にあると考えられる。

最後に「資料Ⅲ」は韓国語の漢字語を中心に載せた。「資料Ⅲ」には、〔シート 1〕「韓国語の高使用頻度 2,000 語」: 韓国語の使用頻度が高い 2,000 語を抽出し、これらの語に「*-hada/-doeda/-的*」が付加するかどうかを載せた。〔シート 2〕「韓国語母語話者判定と辞書記述」: 韓国語の漢字語 2,000 語に対し、品詞の判別を、辞書の記述と 2 名の母語話者の判定から確認できるようにした。〔シート 3〕「韓日同形 2 字漢字語 1,920 語」: 2,000 語のうち日本語にあるかどうかを調べた結果、1,920 語が抽出された。この 1,920 語に対し、韓国語の語尾の付加と日本語の語尾の付加を比較できるように双方を対応して載せた。〔シート 4〕「日本語に無い漢字語 80 語」: 2,000 語のうち、日本語には存在しない 2 字漢字語 80 語を載せた。「資料Ⅲ」の作成を通して、韓国語の 2 字漢字語のうち、動詞として使われる語の割合が非常に高いことが分かった（902 語/2,000 語）。それに比べ、形容詞として使われる語は少なく（103 語/2,000 語）、「*-的*」を付加する語が非常に多いことが明らかになった（389 語/2,000 語）。以上、3 つの資料の作成から、日韓同形語における 2 字漢字語の比較対照を通して類似点や相違点が明確になった。本研究では、日韓両言語ともに、最も基本的である 2 字漢字語を選別し、調査の対象とした。一方の言語では使用頻度の高い語でも、もう一方では漢字語は存在しているが実際の使用率は低い語があるなど、両言語で使用の実態が異なっているという問題点も明らかになった。

第 6 章は総括である。韓国は、表面的にはハングルを使う環境であるが、漢字文化が浸透しており、漢字語の存在は、固有語と共に韓国語の語彙体系の中心である。そこで、日本語と韓国語の 2 字漢字語に着目し、両言語の類似点や相違点を比較対照研究の視点から明らかにし、日韓 2 字漢字語のデータベースを作成した。特に日本語と韓国語において使用頻度が高い 2 字漢字語を対象とし、韓国語の 2 字漢字語の語彙性アスペクトを検討することで、漢字語の品詞性による語尾の予測ができることが明確になり（3 章）、両言語の 2 字漢字語の形態的要素を計量的に検討し、日韓間の比較対照の検討を行った（4 章）。これにより、両言語における 2 字漢字語の品詞性による語尾のずれや、両言語内の品詞性の特徴を計量的手法で検討した。本研究で作成した日韓 2 字漢字語のデータベースが、両言語の教育現場における語彙学習に貢献できることを願っている。